

XenosagaI・II - 第七話 嫌疑 - Verdacht - 上

アレン：あれがクーカイ・ファウンデーションですかあ。この艦同様、金掛かってるなあ。

モモ：デュランドルがそのまま、摩天楼[メトロポリス]になるなんて綺麗――

シオン：え？ この艦、このまま入港するの？

アレン：この艦、ファウンデーションの有名なランドマークなんだそうですよ。

エルザの中にあった、トラベルガイドに載ってました。

シオン：そうなんだ、旅行ページって、あんまり見ないから――

モモ：あっ、ほら――入港ですよ。

アレン：うわわわわ！

モモ：わあ～！

嫌 - Verdacht - 疑

シオン：すごい、本当に都市の一部になるように、デザインされてるのね。

???：観光に来るなら、ニューイヤーズ・イブがいい。

ライトアップしたメトロポリスはなかなかの眺めだよ。

Jr.：よう、ガイナン。

ガイナン：いろいろ収穫があったようだな。後でゆっくり聞かせてもらう。

Jr.：ああ――

ジギー：――ガイナン・クーカイ。クーカイ・ファウンデーション代表理事か――

シオン：えっ、Jr.――くん？

ガイナン：――なにか？

シオン：い、いいえ。――はじめまして。

ガイナン：クーカイ・ファウンデーションへようこそ。

シオン：（？ いま、握手した手のひらに、なにか書いてあったような――）

ガイナン：だいたいの事情は、マッシュズ船長とケイオスから聞いている。――よろしいか。

シオン：は、はい、お世話になります。

ガイナン：――楽しい御滞在を。

シオン：（私ったら――初対面の人に、失礼よね）

ガイナン：（シオン・ウヅキといったか。――いや、まさかな。）

君がモモさんだね。

接触小委員会のユリ・ミズラヒ博士から、報せをもらっている。

ミルチアまで安全に送ろう。

モモ：ママから――ですか！

ガイナン：ああ、よろしく頼む――とおっしゃっていたよ。

モモ：ママと話せますか？

ガイナン：どうかな、とてもお忙しそうだ。

モモ：そう――ですか。どうして、いつも会ってくれないのかしら。

ガイナン：また通信が入ったら、必ず報せよう。

モモ：はい――ありがとうございます。

⇒ [サブストーリー4: Jr. 篇](#)

――

Jr.：あの KOS-MOS って奴の能力[ポテンシャル]、並大抵じゃないぜ。

どう見ても試験運用型[テストタイプ]ってガラじゃねーな。

グノーシスを吸収したとき、エミュレーターと共鳴してたことも気になる。

ガイナン：ヒルベルトエフェクト実装型か――元型[アーキタイプ]は損失したと聞くが、いろいろ裏がありそうだな。

それにシオンという KOS-MOS の管理者――

彼女、気づいているかもしれんな、俺たちの能力[ちから]に。

Jr.：まさか、フツーの人間がか？

ガイナン：普通でない可能性はあるんじゃないか。

Jr.：そうかな、見たところ普通の女の子だけど――まあ、ヘルマーのおっさんも関係している”例の計画”の最重要機密に携わっているわけだから、そういうこともありうるか――

ガイナン：プロジェクトゾハル――か。

Jr.：――

――なあ、しばらくさ、ミズラヒの話はよそうぜ。

ガイナン：ふむ、あのモモという娘[こ]への気遣いか。

Jr.：なんだよ、その目は。誰も狂人の子だなんて言われたかねーだろ。

もっとも、俺たちはミズラヒの最期の場所となった”あそこ”にいあわせ、一部始終を見ている。

モモはレアリエンだ。記憶を刷り込まれてる可能性もあるけどな。

ガイナン：彼女の抱いているミズラヒ像の方が、虚像だというわけだな。

Jr.：わっかんね。だからこそ保留にしておきたいのさ、とりあえず――いまはな。

ガイナン：そんなに気にかかるのなら浜辺[ビーチ]にでも誘ったらどうだ。彼女も少しは気分転換になるだろう。

Jr.：だから、そういうんじゃねえて言ってんだろ

俺はいくぜ！

ガイナン：――おい。

Jr.：っと、なんだよ――これ。

！ ステンレス仕上げのPM[マカロフ]じゃねーか！ ――しかも紙箱付きかよ。

ガイナン：先週たまたま、サザビーズの『古代武器コレクション』に出ていたので、落札してみた。

Jr.：なに企んでんだよ、ガラでもねえ。

ガイナン：――別に。今回もいろいろ仕入れてきてくれたし、最近よく働いているようだから

ボーナスでも――と思ったんだが、余計なお世話だったかな。

Jr.：そ、そんなことねえよ！

ガイナン：むやみやたらと撃つなよ。俺より年上なんだ、少しは年長者らしく振まってくれ。

Jr.：――サイコーッ！！

⇒ [サブストーリー10：ガイナン篇](#)

―

アレン：――主任、やっぱり最近変ですよ。

シオン：そ、そうかな――

アレン：どうしたんです？ 僕の気のせいかな、この艦に乗ってから主任、妙に暗くありません？

シオン：べ、別に――なんでもないわよ。なに、そんな風に見える？

アレン：見えてます、思いっきり。

シオン：そうーか。

アレン：ほら、その感じ。

シオン：い、いろいろ考え事あるからーそのせいよ、きっと。

アレン：ホントですか？ 僕でよければ、いつだって悩み事の相談くらいー

シオン：あら？

Jr.：シ・オ・ン！ 遊びに行こうぜっ。

シオン：Jr. くんー

Jr.：ランチ乗り場で待ってるからさ、すぐ来いよ、んじゃ！

シオン：えっと、なんだったのかしらー

アレン：なんだったんでしょうねー

ーっと、でも遊びに行くってのはいいアイデアですよ。

ランチ乗り場はドックエリアですね。さ、用意しましょう。ささ！

シオン：ちょ、ちょっとアレンくんー

ランチ乗り場

Jr.：おっせーぞ！

モモ：シオンさんたちの分は、モモと Jr. さんで見立てておきました。

シオン：見立てるってなにをー

Jr.：行きゃあわかるって！ さ、ランチに乗った乗った！

プライベートビーチ

Jr.：そ〜れっ。

モモ：はいっ。

ケイオス：アレンさん、行きましたよ。

アレン：わわわっ。

Jr.：あ〜あ、なにやってんだよ。

アレン：ご、ごめんごめんー

シオン：（あのとき、KOS-MOS はモモちゃんへの共感とともとれる行動をとった、もちろん自発的にー）

ケビン：――彼女にも心があると思うって言ったら、君は笑うかな。

シオン：KOS-MOSに精神活動ですか――？

ケビン：興味深い現象を見つけたんだ。もちろん、まだごく弱いパルスのようなものでしかないけれど――

シオン：本当ですか！ それは引き続き観察する価値がありますよ。

KOS-MOSの素子構造は人脳を忠実に再現していますから、あり得ない話じゃないと思います。

シオン：モモちゃんへの共感行動――あのときの深層領域下波形は――フラットライン。

ダメか――なんにもなしね。

アレン：どうしたんですか、主任。せっかくビーチに来たのに、モニターとにらめっこだなんて。

モモ：そうですよ、シオンさんも一緒に遊びましょう。

シオン：ごめん、ちょっとね――

モモ：KOS-MOSさんですか？ 大変なんですね。

アレン：KOS-MOSね、僕らでも解析しきれないブラックボックスの部分が多いんだ。

モモ：ブラックボックス――

アレン：うん、だから少しずつ少しずつ解析して行って、”昔の姿”に近づけていってるんだよ。

KOS-MOSのこと熟知してたの、ケビン先輩だけだったから――

（あ、しまった――）

シオン：ねえアレンくん――Jr.くんとガイナン氏って親子なのかな。

兄弟にしては、随分歳が離れてるみたいだけど。

アレン：（よかった――気にしてないみたいだ）

ああ、ええと、世襲用にセルフクローニングしたとか、隠し子だとか、ゴシップはあれこれ聞きますけど――

モモ：クローンではないと思います。ゲノム配列が微妙に違う感じ――

シオン：凄い、モモちゃんそんなことまでわかるの？

モモ：モモは観測用ですから――そうですね、親子兄弟というほど差異はないのに、

同じ構造とは言えないような――

シオン：そんな存在ってあるの？ 塩基配列が0.1%違えば、完全に他人なのに――

Jr.：だーれが隠し子だって？

アレン：い、いやあ、素晴らしい海岸だね。とても人工ビーチとは思えないよ。

Jr.：うちの新品だからな。天候も変えられるのが売り。青空ばかりじゃ芸がない――ってね。

シオン：雷は――いや――

Jr.： シオン？

シオン： いやああああっ！

止めてええっ！

雷はいやあああっ！！

Jr.： あ、わ、わりい！

も、もう戻したから——ほんとに悪い——

シオン： —————

—————

ごめん——

雷は——いやなの——

ケイオス： シオン————

⇒ [サブストーリー5：シオン篇](#)

—

ガイナン： 相変わらず多忙そうだな、ヘルマー代表。

ヘルマー『第二ミルチア自治政府の代表と言っても、君の多忙さにはかなわんよ。そちらはどうかね、漆黒[ニグレド]。』

ガイナン： ——その呼称、あまり心地よくはないな。

ヘルマー『失礼、ガイナンという響きにいまだ馴染めなくてね。で、何事かな——？』

ガイナン： そちらへ向かっている。微妙な積荷を乗せているので報せた方が良かろうと判断した。

ヘルマー『——ほう。』

ガイナン： 連邦の巡洋艦ヴォークリンダー——その積荷を思わぬ縁で確保した。”エミュレーター”だ。

ヘルマー『十二器め——か。U-TIC 機関の記録と一致するな。』

ガイナン： ああ、先の惑星[アリアドネ]消失事件のものと見て間違いない。

U-TIC 機関[やつら]がその後建造していなければ、これですべてになる。

——オリジナルを除いてだが。

ヘルマー『それは不可能だろう。あれを建造出来る男は、”この世にはもういない”。』

ガイナン： そうだったな。それともう一つ——接触小委員会の百式観測器[プロトタイプ]の保護に成功した。

ヘルマー『まさか、それらが同時に到着したというのかね？』

ガイナン：ああ、救出任務の帰路に確保したという次第だ。――私も少し驚いている。

ヘルマー『偶発要素を引き起こせる磁力も君特有の能力のうちかね。』

ガイナン：偶然ではなく蓋然だ――と、ある知人なら言いそうだが。

ともあれ、U-TIC 機関の動きには多少引っ掛かるものがある。

そちらの警戒も強めた方が良くかもしれん。

ヘルマー『U.M.N. 管理局には打診をしておこう。艦隊規模の転移はそれで探知できるからな。』

ガイナン：――賢明だ。連中の手にエミュレーターが存在しないと仮定した場合、

十中八九、旧ミルチアに封印されているオリジナルを狙ってくるはずだ。そして――

ヘルマー『”ウ・ドゥ”か。』

ガイナン：連中の最終的な目的が何かはわからないが、あれを再び目覚めさせるわけにはいかない。

――なにがあっても、だ。

ヘルマー『了解した、君たちの到着に備えよう。再会を楽しみにしているよ。』

— 

セラーズ『――出力は 5.806LPP、規定値の 3% にも満たなかった。』

マーグリス：つまり、Lost Jerusalem[ロスト・エルサレム]への扉を開くことは不可能ということか――

セラーズ『扉どころか、探索すらおぼつかん。

エミュレーターはあくまで補機だと何度も言ったはずだが、それを無視したのはお前だろう。

おかげで貴重な遺産のすべてを失うことになった。

余剰部品で組み上げてはみたが、五十歩百歩だろうよ。

ミズラヒですら、オリジナルなくして辿り着けなかった高みだからな。』

マーグリス：あの狂人を認めるとは、貴様も殊勝になったものだ。

セラーズ『客観的な視点に立ったまでさ。この分野で奴の右に出る者は、この宇宙には存在せんからな。』

マーグリス：これ以上、総帥をお待たせするわけにはいかん。プラン 401 を発動させた。

セラーズ『プラン 401 か――些か強引過ぎる気もするが。

ヘルマーの子飼いに渡ったミズラヒの百式プロトタイプ――奴の研究成果の全記録はもとより

閉塞された旧ミルチア宙域 U.M.N. 転移コラムの解除コードが記録されているのはアレだけだ。

手荒に扱うと全てを失うぞ。』

マーグリズ：Y資料もミルチアも、その重要性は承知している。そのための”奴”だ。

セラーズ『――好かん、あの男は。ミズラヒと同じ目をしている。』

マーグリズ：貴様と、だろう。

セラーズ『ふん、ま、吉報を待っているよ。』

マーグリズ：ペレグリー、奴への回線をつないでくれ。不愉快ではあるが、話さねばならんこともある。

ペレグリー：――――――

アルベド『――これはこれは、あんたの方から呼び出しとはね。』

アルベド『なるほど――で、俺はどうすればいい。』

マーグリズ：状況はすでに進行中だ。その間は手を出すな。

もっとも、第二ミルチア自治政府やクーカイ・ファウンデーションが、素直に渡すとも思えない。

状況によってはネピリムの歌声――使うかもしれん。

アルベド『これはまた、毛嫌いしてたんじゃないのか。』

マーグリズ：貴様の玩具にも、使い道はあるということだ。

アルベド『なんなら、あんたも来るかい？ 歓迎するぜ。』

マーグリズ：遠慮しておこう。俺は貴様のようには悪趣味ではない。

アルベド『ひゃっはははは！ ――よく言うぜ、貴様らのほうがよっぽど悪趣味だ。』

ペレグリー：アルベド・ピアソラー―U.R.T.V.の生き残りのひとり、ライフリサイクルが産んだ怪物――

ライフリサイクルの変異体は、精神的にも不安定なケースが多い。

あのアンドリューがそうだったようにね。

もししびれを切らして、下手に動かれでもしたら――

マーグリズ：その心配は無用だ。時間は奴を拘束しないからな。奴の興味は、自分の同類だけさ。

ペレグリー：――ネピリムの歌声、本当に使うの。

マーグリズ：ペレグリー、貴様は聞いたことがあるか。あの歌は――

――すべてを狂わせる。